

Johann Sebastian Bach

Johannes Passion

J.S.バッハ ヨハネ受難曲 対訳

第1～4稿 & 総譜版 完全翻訳

テキストについて

自由詩（レチタティーヴォ&アリア、合唱）の作詞者は不明

ただし、ハンブルク市参事会員バルトルト・ハインリヒ・ブロッケス(Barthold Heinrich Brockes,1680-1747)が書いた「ブロッケス受難曲」台本がネタになっている曲が8曲ある(No.7・19・20・24・32・34・35・39)。この台本にはテレマンやヘンデルが作曲しており、バッハは後年ヘンデルの「ブロッケス受難曲」(1719)のスコアを筆写している。

聖句 「ヨハネによる福音書」第18～19章

ただし次の2箇所でマタイからの挿入あり。(第3稿ではこれらの引用を削除している。)

- ①. 「ペテロの否認」後…… マタイ 26:75 (ペテロが泣いた)
- ②. 「イエスの死」後 …… マタイ 27:51-52 (神殿の幕が裂ける、地震、墓が開き聖者が目覚める)
第1稿では②がマルコ 15:38 (神殿の幕が裂けるだけ) だった。

コラールについて

ヨハネで複数回使用されているコラール2種類

「Jesu Leiden, Pein und Tod」 Paul Stockmann(1603-36)
No.14 (第10節)、No.28 (第20節)、No.32 (第34最終節、バスのアリアと共に)
さらに第2稿では、No.11の後に追加されたテノール・アリアと共にソプラノが第33節を歌う。

「Christus, der uns selig macht」 Michael Weiße(1488-1534)
第15曲(第1節)、第37曲(第8節)

マタイと共通のコラール2種類

「Herzliebster Jesu」 詞： Johann Heermann(1585-1657)、旋律： Johann Crüger(1598-1662)
第3曲(第7節)、第17曲(第8・9節)

「O Welt, sieh hier dein Leben」 詞： Paul Gerhardt(1607-76) 旋律： Heinrich Isaac(1450c.-1517)
第11曲(第3・4節)

その他のコラール

- 第5曲 Martin Luther「Vater unser im Himmelreich」第4節
- 第22曲 詞： Christian Heinrich Postel(1658-1705)作のアリア詩
旋律： Johann Hermann Schein (1586-1630)「Mach's mit mir, Gott, nach deiner Güt」
- 第26曲 詞： Valerius Herberger(1562-1627)「Valet will ich dir geben」第3節
旋律： Melchior Teschner(1584-1635)
- 第40曲 Martin Schalling(1532-1608)「Herzlich lieb hab ich dich, o Herr」第3節

※第2稿では全曲の冒頭合唱と終結合唱がコラールに変更されている

第1曲 「O Mensch, bewein dein' Sünde groß」 →のちマタイ第2稿で第1部終曲に再利用
詞： Sebald Heyden(1499-1561)、旋律： Matthias Greitter(1495-1550)

第40曲 「Christe, du Lamm Gottes」
ルター作詞のドイツ語による「Agnus Dei」
1723年、トマス・カントル就任試験で演奏したカンタータ第23番の終曲を転用

＜総譜および4つの稿について＞

ヨハネ受難曲には、一般的に演奏されている総譜版(1739/49)とは別に、第1稿から第4稿までの4つの稿がある。

第1稿は、1724年4月7日の聖金曜日に聖ニコライ教会で初演された。この時にいったん総譜が作成され、後の改訂の資料とされたはずだが、今は失われてしまっている（以下、これを旧総譜と呼ぶ）。この稿と第2稿以後の版との大きな違いは、イエス死後の奇跡(第33曲)については、マタイ福音書ではなくマルコ福音書 15:38 が引用されていることである。「神殿の幕が裂けた」だけで地震その他は起こらない。ただ、そのテノール・パート譜が失われているので、演奏するには復元作業が必要である。

第2稿は、翌1725年3月30日に聖トマス教会で再演されたもので、大きな改訂がされている。以下に列挙する。

- ・第1曲合唱「Herr, unser Herrscher」を、後にマタイ受難曲第1部終結曲になっているコラール「O, Mensch..」に変更。
- ・第11曲コラールの後に、バスのアリア（ソプラノのコラール付き）を1曲追加。
- ・第13曲のテノール・アリア「Ach, mein Sinn..」を、別の曲「Zerschmettert mich...」に変更。
- ・第19曲バス・アリオソ「Betrachte」と第20曲テノール・アリア「Erwäge」の2曲を、テノール・アリア「Ach windet..」1曲に置換。
- ・第33曲、イエス死後の奇跡の場面の聖句を、マルコ福音書ではなくマタイ福音書 27:21-52に変更した。「神殿の幕が裂け、地震が起こり墓が開いて聖者たちの身体が甦った。」
- ・第38曲、聖句のうち「ヨゼフがイエスの遺体を十字架から降ろした」という1文がカットされている（この点、種々の解説で指摘されていない）。
- ・第40曲最終コラール「Ach Herr...」を、カンタータ第23番終曲コラール「Christe, du Lamm Gottes」に変更。

しかしここでの変更点で、後の総譜や稿に受け継がれたのは、第33曲のマタイの引用だけである。

この時、旧総譜をもとにして作り直した第2稿パート譜が、ほぼ完全に残っている。その後の稿にもこのパート譜を用いたため、第3稿・第4稿への変遷についても読み取れる貴重な資料となっている。

さらに近年、ニュルンベルク市立図書館の所蔵する『神により聖化された安息日十行詩』というタイトルの台本集の中に、ヨハネ第2稿の台本が完全な形で収録されていることが発見された。この台本集の著者はクリストフ・ビルクマン(Christoph Bilkmann, 1703-71)というニュルンベルク生まれの人物で、1724年12月にライプツィヒにやってきて27年9月までライプツィヒに滞在し、バッハとも交流があった。この台本集には71曲のカンタータ台本が収録されているが、ビルクマン以外の作詞者のものもあり、一つ一つの台本作者の名がわかる情報は無い。そのうち23曲がバッハ作曲のカンタータで、1724年待降節から1727年顕現節の間に上演されたものである。それらと並んでヨハネ受難曲第2稿の台本も収録されている。

ビルクマンがライプツィヒに来た1724年末は、バッハにとってライプツィヒ2年目のシーズン始まりにあたる。バッハは2年目のカンタータを「コラール・カンタータ」シリーズとして構想していた。その台本提供者はアンドレアス・シュテューベルだったが、彼が25年1月に急逝してしまった。そこでバッハが新たな協力者に選んだのがビルクマンであり、ヨハネ第2稿の台本も彼の手になるものであった、という可能性も大いに考えられる。

1727年4月11日には聖トマス教会で「マタイ受難曲」初稿（第1部終曲は単純なコラール）が演奏された（29年にも再演）。

ついで「ヨハネ」第3稿が、1732年4月11日に聖ニコライ教会で演奏された。

この稿の最大の特徴は、ペテロ否認後のマタイの引用(第12曲)、イエス死後のマルコ・マタイの引用(第33曲)を一切削除したことである。

その結果、第13曲のアリアは第1・2稿とは別のアリアに変更されたが、現在その曲は失われてしまっている。その失われたアリアの調性に合わせて第14曲のコラールの調性がイ長調からト長調に移調された。

また、第33曲を受けての第34曲アリオソ・第35曲アリアも削除され、この3曲にかわってこれまた現在は失われたシンフォニアに変更された。

一方で、第11曲の後に第2稿で追加されたアリアは削除された。第1曲冒頭合唱や、第19・20曲も第1稿のものに戻された。

そして最後に、第40曲終曲コラールが削除され、第39曲「Ruht wohl」の合唱で全曲を閉じる形となった。

1736年3月30日、聖トマス教会で「マタイ」第2稿が上演された。第1部終曲を、「ヨハネ」第2稿の冒頭コラール「O Mensch」に変更し、第2部冒頭のアリアをバスからアルトに変更した現行版である。この上演のためにバッハは美しい総譜を作成している。

1739年には「ヨハネ」の演奏が計画され、それに向けてバッハは、36年マタイと同様、総譜の清書を開始した。ところが、この上演はライプツィヒ市参事会からストップをかけられ中止された。その原因は受難曲のテキストにあったという。実は以前から、他の福音書の引用に関して批判があり、それを受けてバッハは32年の第3稿ではマタイなどの引用を削除したのであった。

ところが39年にまたテキスト問題で批判が出たということは、この時バッハは、マタイの引用の復活を図っていたようである。しかし演奏中止となつたため、総譜作成は第10曲までで中断され、以後10年間放っておかれることとなった。

そして1749年、バッハは弟子のJ.N.バムラーに、第11曲以降を旧総譜から筆者させ新しい総譜を完成させた。現在、一般的に演奏されているこの「総譜」で、第1稿と異なる所は、第33曲での聖句引用がマルコではなく第2稿のマタイの引用であることだけ、と言ってよい。しかし、バッハの生前にはこの総譜による演奏は一度もなされたことがなかった。

一方同じ1749年4月4日、聖ニコライ教会で「ヨハネ」第4稿が上演された。

その頃は市参事会も代替わりして、うるさいことを言わなくなっていたらしい。そこでバッハは、おそらく同時進行でバムラーに作成させていた総譜と同様、第12曲・第33曲のマタイ福音書の引用を復活させた。

しかし総譜と第4稿で異なる点もいくつかある。

まず第9曲は、第3稿以前は171小節だったが、総譜では後奏を短縮して164小節にした。しかし第4稿では後奏を再拡大して172小節にし、さらに歌詞も若干変更している。第19曲も歌詞を一部変更、第20曲については歌詞を全面的に変更している。

また第4稿では、全曲にわたってチェンバロ（および一部コントラファゴットも）が伴奏楽器に加えられた。その結果、総譜では第19曲の伴奏に入っていたリユートも削られてしまっている。

ほぼ同時に作成された総譜と第4稿の間に、なぜこうした違いがあるのか理由は不明である。しかし、おそらく第4稿については、これまで同様、バッハが各演奏機会の個別の条件に対して柔軟に対処していた結果の産物であろう。彼は“職人”であることが求められていたのである。

一方で、“芸術家”としてのバッハは、生涯の最期に“普遍的なもの”を残そうとした。それが現行の総譜なのだろう。

<シューマン編曲版>

シューマンはデュッセルドルフ市の音楽監督となった翌年1851年に「ヨハネ受難曲」を蘇演している。その版によるヘルマン・マックス指揮の録音がcpoレーベルから発売されている。このCDによれば（私はシューマン版の楽譜は確認していない）、メンデルスゾーン蘇演版の「マタイ受難曲」とは異なり、曲のカットは無い。基本的に総譜版の歌詞で歌われている。ただし、第13・20・35番の3曲のテノール・アリアはソプラノが歌っている。また第20番の歌詞は第4稿の歌詞になっているが、これはマックスがバッハの第4稿を録音しているからかも知れない。

音の違いはかなりある。オケも拡充されているようで、金管が鳴る場面もある。が、「ヨハネ受難曲」の基本的雰囲気は保持されている。

<ヨハネ受難曲における“十字架”構造>

ドイツの音楽学者フリードリヒ・スメントは、「バッハのヨハネ受難曲 – その構造の研究」(1926)において、ヨハネ受難曲第2部には前後対称の楽曲配分による心臓部を持つ、と指摘した。さらに1928年にはマタイ受難曲にも同じ構造がある、と指摘した。

これは「キアスムス（交叉配列法）」というキリストの頭文字Xに由来する伝統的象徴技法で、ヨハネ受難曲ではNo.22を中心にNo.16～27までの楽曲配列が、十字架的なシンメトリーを形成するものである。

No.16e	レチタティーヴォ	そこでピラトはもう一度官邸に入り、イエスに言った「お前はユダヤ人の王なのか」	
No.17	コラール	「ああ、偉大なる王」	
No.18a	レチタティーヴォ	ピラトは言った「お前は王なのか」、イエスは言った「あなたが言う通り、私は王である」	
No.18b	合唱	「その者ではなくバラバを」	
No.18c	レチタティーヴォ	バラバは殺人者だった。ピラトはイエスを鞭で打った。	
No.19	アリオソ	「よく見よ、我が魂よ」	} 第2稿ではNo.19 II アリア「ああ、そんなにのたうつな」
No.20	アリア	「考えてみよ」	
No.21a	レチタティーヴォ	兵士たちは茨の冠を編んでイエスにかぶせ、	
No.21b	合唱	「ごきげんよう、ユダヤ人の王よ」	
No.21c	レチタティーヴォ	そしてイエスに平手打ちを食らわせた	
No.21d	合唱	「十字架につける」	
No.21e	レチタティーヴォ	ピラトは彼らに言う「お前たちが彼を十字架につければよい」	
No.21f	合唱	「我々は律法を持っている」	
No.21g	レチタティーヴォ	ピラトは再び官邸に入りイエスに言った「お前はどこから来たのか」	
No.22	コラール	「神の子よ、あなたが捕らわれたことによって我らに自由がもたらされるに違いない」	
No.23a	レチタティーヴォ	しかしユダヤ人たちは叫んで言った	
No.23b	合唱	「この者を解放するなら、あなたは皇帝の友ではない」	
No.23c	レチタティーヴォ	ピラトはこの言葉を聞くとイエスを連れ出し、自らも裁判の席についた	
No.23d	合唱	「その者を去らしめよ、十字架につけよ」	
No.23e	レチタティーヴォ	ピラトは彼らに言う「お前たちの王を十字架につけてよいのか」	
No.23f	合唱	「我々には王はいない、なぜなら皇帝を戴いているから」	
No.23g	レチタティーヴォ	そこでピラトはイエスを引き渡した、彼が十字架につけられるために	
No.24	合唱付きアリア	急げ、悩める魂よ。どこに？ゴルゴタへ。	
No.25a	レチタティーヴォ	そこで彼らはイエスを十字架につけた	
No.25b	合唱	「ユダヤ人の王、と書くな」	
No.25c	レチタティーヴォ	ピラトは答える「私が書いたものはその通りにしておけ」	
No.26	コラール	「私の心にはあなたの御名と十字架だけが」	
No.27	レチタティーヴォ	さて兵士たちはイエスを十字架に架けてしまうと..	

このシンメトリーの中心となる第22番のコラールは、本来コラールではない自由詩アリアの歌詞を、既存のコラール旋律に当てはめたものである。本来は個人的な感情を表現する自由詩アリアを、信者共同体の立場表明としてのコラールとして扱った、という特殊な例である。

第1部

Nr.1 【合唱】 第1・3・4稿&総譜

Herr, unser Herrscher, dessen Ruhm

主よ 我らの 支配者よ [関]その 栄誉は

in allen Landen herrlich ist!

～に於いて 全ての地 壮麗な

Zeig uns, durch deine Passion,

示せ 我らに ～を通して あなたの 受難

dass du, der wahre Gottessohn,

[接] あなたが [関] 真の 神の子

zu aller Zeit,

～に 全ての 時

auch in der größten Niedrigkeit,

～さえも ～に 最大の 卑賤

verherrlicht worden bist!

賛美する[完分] [受,完分] [現完]

主よ、我らの支配者よ、あなたの栄誉は

全ての地において壮麗なものであります！

お示してください、あなたの受難を通して、

真の神の子であるあなたが、

あらゆる時に、

最も卑しめられた時でさえも、

賛美されていた事を！

※第1曲の冒頭2行は、旧約聖書「詩篇」第8篇冒頭の引用である。

Herr, unser Herrscher,

wie herrlich ist dein Name in allen Landen

主よ、我らの支配者よ、

あなたの名は全ての地において何と壮麗なのでしょう

この冒頭合唱を、第2稿では次ページのコーラルに差し替えた。しかし第3稿以降はまたこの曲に戻されている。

O Mensch, beweine dein' Sünde groß,
 おお 人よ 嘆き悲しめ 汝の 罪が 大きい

おお人よ、汝の罪の大いなることを嘆け。

darum Christus sein's Vaters Schoß
 それ故 キリストは 彼の 父の 懐から

そのためにキリストは父の懐から

äußert und kam auf Erden;
 現れる 来た 地上に

現れ、地上に降りて来られたのだ。

von einer Jungfrau rein und zart
 ~から 一人の 乙女 純粋な 優しい

純粹で優しい一人の乙女から、

für uns er hie geboren ward,
 我々のため 彼は ここに 生まれた (完)

私たちのためにこの世に生まれて、

※ ward=werden の過去 wurde の古形

er wollt' der Mittler werden.
 彼は ~しようとした 仲介者 ~になる

仲介者になろうとされたのだ。

Den Toten er das Leben gab
 死者に(複数3格) 彼は 生命を 与えた

彼は死者たちに生命を与え、

und legt' dabei all' Krankheit ab,
 取り去った そこから 全ての 病気を

彼らからすべての病を取り去って下さった。

※ ab legen(取り去る)

bis sich die Zeit herdrange,
 ~まで 時が こちらに迫って

時が迫るまで。

※ herdrange...her こちらに、Drang 急迫

dass er für uns geopfert würd',
 彼が 我々のために 犠牲にする (受)

(時が来て) 彼は、私たちのために犠牲となり、

trüg' unsrer Sünden schwere Bürd'
 背負う 我々の 罪の(単数2格) 重い 負担を

私たちの罪の重荷を背負って下さった。

wohl an dem Kreuze lange.
 十分に ~において 十字架 長く

十字架上において長い間、十分に。

※ 1725年の第2稿において冒頭合唱をこのコラールに変更したが、1732年の第3稿以降は第1稿の合唱曲に戻した。

そして1736年の「マタイ受難曲」再演にあたり、当曲を変木長調から木長調に移調して、その第1部終結合唱とした。

(1727年マタイ初演時は、第1部終結は「Jesum lass ich nicht von mir(イエスを私から離しません)」の単純なコラールだった。)

Nr.2a (18:1-4)

聖書原文の第 18 章冒頭は「イエスはこれらのことを語り終えると、弟子達とともに、」と始まる。

ルター訳では、**Da Jesus solches geredet hatte**, ging er hinaus mit seinen Jüngern über den Bach Kidron;
シュッツのヨハネ受難曲ではこのようになっているが、バツハは若干冒頭部を省略している。

福音史家 : Jesus ging mit seinen Jüngern
über den Bach Kidron;
da war ein Garte,
darein ging Jesus und seine Jünger.
Judas aber, der ihn verriet,
wusste den Ort auch;
denn Jesus versammelte sich oft daselbst
mit seinen Jüngern.
Da nun Judas
zu sich hatte genommen die Schar
und der Hohenpriester und Pharisäer Diener,
kommt er dahin
mit Fackeln, Lampen und mit Waffen.
Als nun Jesus wusste alles,
was ihm begegnen sollte,
ging er hinaus und sprach zu ihnen:

イエスは弟子たちとともに、
キドロン川の向こうへ渡って行った。
そこには園があって、
その中にイエスと弟子たちは入っていった。
イエスを裏切ったユダもまた、
この場所を知っていた。
というのも、イエスは、しばしばこの場所で、
弟子たちとともに集まっていたからである。
今や、ユダは、
兵士の部隊や、 ※ローマ帝国の軍隊
祭司長たち及びファリサイ派たちの従者を引き連れて、
そこにやって来る、
たいまつ、ランプ、武器などを持って。
その時には、イエスは
自分に起こるべき事を全て承知していたので、
出て行って彼らに言った。

※祭司長と大祭司……どちらも同じ単語 Hohenpriester である（ギリシア語でも archiereus）。

祭司長は、ユダヤ人権力中枢における祭司貴族たちのことで、これは複数いる（die Hohenpriester）。

大祭司は、ローマの代官の下でユダヤ人社会の内政を任されていた政治的首長であり 1 人しかいない（der Hohenpriester）。

上の文では"der Hohenpriester Diener"と、2 格でその定冠詞が der だから複数、すなわち「祭司長たちの」ということになる。

鈴木雅明指揮 BCJ による 2 種類の録音 CD に付けられ、著書「ヨハネ受難曲」にも掲載されている磯山雅氏の対訳では、この区別をつけずに全て「大祭司」と訳されているが、誤りである。

イエス : Wen suchet ihr?

「あなた方は誰を探しているのか？」

福音史家 : Sie antworteten ihm:

彼らは答えた。

Nr.2b (18:4) 【合唱】ユダヤ人たち

Jesum von Nazareth.

「ナザレのイエスを」

Nr.2c (18:5-7)

福音史家 : Jesus spricht zu ihnen:

イエスは彼らに言う。

イエス : Ich bin's.

「私がそうだ」

福音史家 : Judas aber, der ihn verriet,
stund auch bei ihnen.
Als nun Jesus zu ihnen sprach: Ich bin's,
wichen sie zurück und fielen zu Boden.
Da fragete er sie abermal:

イエスを裏切ったユダも
彼らの側に立っていた。
イエスが彼らに『私がそうだ』と言った時、
彼らは後ろに退いて地に倒れた。 ※第 2 稿は zurück
イエスは再び彼らに尋ねた。

イエス : Wen suchet ihr?

「あなた方は誰を探しているのか？」

福音史家 : Sie aber sprachen:

彼らは言った。

Nr.2d (18:7) 【合唱】ユダヤ人たち

Jesum von Nazareth.

「ナザレのイエスを」

Nr.2e (18:8)

福音史家 : Jesus antwortete:

イエス : Ich hab's euch gesagt, dass ich's sei.
Suchet ihr denn mich,
so lasset diese gehen!

イエスは答えた。

「私がそうだ、とあなた方に言ったではないか。
あなた方が探しているのは私なのだから、
この者たちは行かせてやれ！」

Nr.3 コラール

詞 : ヨハン・ヘールマン「Herzliebster Jesu」第7節、 旋律 : ヨハン・クリューガー

O große Lieb, o Lieb ohn alle Maße,
おお 大いなる 愛 愛 ~無し の 全ての 限度(複)

おお、大いなる愛、限度の無い愛よ、

die dich gebracht auf diese Marterstraße!

それがあなたをこの責め苦の道へと連れて行ったのです。

[関] あなたを 連れて行った※ ~へ この 責め苦の道

※ bringen(持って行く)完了分詞

Ich lebte mit der Welt in Lust und Freuden,

私は世と共に、快樂と喜びのうちに生きたのに、

私は 生きた ~と共に 世 ~の内に 快樂 喜び

und du musst leiden.

あなたは苦しみを受けねばならなかったのです。

あなたが ~ねばならなかった(過去) 苦しむ

Nr.4 (18:9-11)

福音史家 : Auf dass das Wort erfüllet würde,
welches er sagte:

Ich habe der keine verloren,
die du mir gegeben hast.
Da hatte Simon Petrus ein Schwert
und zog es aus
und schlug nach des Hohenpriesters Knecht,
und hieb ihm sein recht Ohr ab;
und der Knecht hieß Malchus.
Da sprach Jesus zu Petro:

それは、彼の言葉が果たされるためであった。

彼は次のように語っていたのである

『私は、誰も失わなかった、
あなたが私に与えた者を。』

その時、シモン・ペテロは剣を持っていたので、
それを抜き、

大祭司の下僕に打ちかかり、

彼の右の耳を切り落とした。

その下僕の名はマルコといった。

そこでイエスはペテロに言った。

イエス : Stecke dein Schwert in die Scheide!
Soll ich den Kelch nicht trinken,
den mir mein Vater gegeben hat?

「剣を鞘に収めよ！

私は飲まずにいられようか、

父が私に与えたこの杯を？」

Nr.5 コラール

マルティン・ルター「Vater unser im Himmelreich」第4節

Dein Will gescheh, Herr Gott, zugleich

あなたの 意志が 起これ 主なる 神よ そしてまた

あなたの意志が実現しますように、主なる神よ、

auf Erden wie im Himmelreich.

~に 地 ~のように ~に 天国

天国と同じように地上においても。

Gib uns Geduld in Leidenszeit,

与えよ 我らに 忍耐を ~の中で 苦しみの時

苦しみの時において、我らに忍耐をお与えください、

gehorsam sein in Lieb und Leid;

従順な ~であるように※ 愛 苦しみ

愛のうちでも苦しみのうちでも、我らが従順であるように。

※ sein → seien[接2複]

wehr und steur allem Fleisch und Blut,

守れ※ 導け※ 全ての 肉 血から

守り、導いてください、全ての肉と血から、

※ wehren 守る、steuern 導く

das wider deinen Willen tut!

[関] ~に逆らって あなたの 意志に 行う[3単現]

あなたの意志に逆らう(肉と血から)！

Nr.6 (18:12-14)

福音史家 : Die Schar aber und der Oberhauptmann und die Diener der Juden nahmen Jesum und bunden ihn und führten ihn auf's erste zu Hannas; der war des Kaiphas Schwäher, welcher des Jahres Hoherpriester war. Es war aber Kaiphas, der den Juden riet, es wäre gut, dass ein Mensch würde umbracht für das Volk.

兵士の部隊、千卒長、およびユダヤ人の従者たちは、イエスを捕らえ彼を縛って、最初にハンナの所へ連れて行った。彼(ハンナ)は、この年の大祭司であるカイファの舅であった。そのカイファは、ユダヤ人たちに助言したことがあった、『一人の者が民のために殺されることは良いことだ』と。

※ハンナはカイファの3代前の「元」大祭司(在位 6-15)。カイファが大祭司だった時代(在位 18-36)、彼の舅であるハンナは祭司長として実権を握っていた。マタイ福音書等では大祭司カイファ邸で行われたと記されている「夜中の裁判」は、ヨハネ福音書では、まず祭司長ハンナ邸で行われ、その後カイファ邸へと移動した、と記されている。

Nr.7 アリア (アルト)

Von den Stricken meiner Sünden mich zu entbinden, wird mein Heil gebunden; Mich von allen Lasterbeulen völlig zu heilen, lässt er sich verwunden.

私の罪の縄から私を解放するために、私の救い(主)は拘束される。私の全ての悪癖の腫瘍を、 Laster 悪癖、Beule 瘤・腫瘍完全に治すために、 jn- heilen ~の病気を治療する彼は自らを傷つけられたのだ。 jn- verwunden ~を負傷させる

※第7曲は「ブロッケス受難曲」冒頭合唱の歌詞を下敷きしている。同曲は「信じる魂たちの合唱」と題されている。2節からなるその1節目、「我々の悪徳の腫瘍を治すためにイエスは傷つけられたのだ」という内容をバツハはほぼそのまま引用している。ブロッケスではこの冒頭合唱の後に「最後の晩餐」の場面が続く。

Nr.8 (18:15)

福音史家 : Simon Petrus aber folgete Jesu nach und ein ander Jünger.

シモン・ペテロはイエスの後について行った。そしてもう一人の弟子も(一緒だった)。

※この「もう一人の弟子」こそが「ペテロの否認」などについての情報源である。しかし彼に言及しているのはヨハネ福音書のみである。

Nr.9 アリア (ソプラノ) 第1～3稿&総譜

Ich folge dir gleichfalls mit freudigen Schritten und lasse dich nicht, mein Leben, mein Licht. Befördre den Lauf und höre nicht auf, selbst an mir zu ziehen, zu schieben, zu bitten!

私も(ペテロと)同じく、あなたについて行きます、喜ばしい足どりで、そして、決してあなたから離れません、 gleichfalls ~と同じく私の命、私の光よ。 jn(方向等)befördern ~へ送り出す(私を)進路へと促して下さい、そして止めないで下さい、 auf|hören 停止する、止まるあなた自らが私を引っ張ったり、押したり、招くことを!

Nr.9-IV アリア (ソプラノ) 第4稿(若干の歌詞変更)

Ich folge dir gleichfalls **mein Heiland mit Freuden** und lasse dich nicht, mein **Heiland**, mein Licht. **Mein sehnllicher Lauf hört eher nicht auf, bis dass du mich lehrest, geduldig zu leiden.**

私も(ペテロと)同じく、あなたについて行きます、**喜びとともに我が救い主に**そして、決してあなたから離れません、私の**救い主**、私の光よ。私の憧れる進路は止まることはありません、 eher ~より早く、~より前にはあなたが私に教えてくれる時より前には、苦難に対して忍耐強くあることを。

Nr.10 (18:15-23)

福音史家 : Derselbige Jünger
war dem Hohenpriester bekannt
und ging mit Jesu
hinein in des Hohenpriesters Palast.
Petrus aber stund draußen für der Tür.
Da ging der andere Jünger,
der dem Hohenpriester bekannt war,
hinaus und redete mit der Türhüterin
und führte Petrum hinein.
Da sprach die Magd, die Türhüterin
zu Petro:

下女 : Bist du nicht auch
dieses Menschen Jünger einer?

福音史家 : Er sprach:

ペテロ : Ich bin's nicht.

福音史家 : Es stunden aber die Knechte und Diener
und hatten ein Kohlfew'r gemacht,
(denn es war kalt) und wärmten sich.
Petrus aber stund
bei ihnen und wärmte sich.
Aber der Hohepriester fragte Jesum
um seine Jünger und um seine Lehre.
Jesus antwortete ihm:

イエス : Ich habe frei, öffentlich geredet für der Welt.
Ich habe allezeit gelehret
in der Schule und in dem Tempel,
da alle Juden zusammenkommen,
und habe nichts im Verborgnen geredt.
Was fragest du mich darum?
Frage die darum, die gehöret haben,
was ich zu ihnen geredet habe!
Siehe,
dieselbigen wissen, was ich gesaget habe.

福音史家 : Als er aber solches redete,
gab der Diener einer, die dabei stunden,
Jesu einen Backenstreich und sprach:

従者 : Solltest du dem Hohenpriester
also antworten?

福音史家 : Jesus aber antwortete:

イエス : Hab' ich übel geredt,
so beweise es, dass es böse sei;
hab' ich aber recht geredt,
was schlägest du mich?

この弟子は
祭司長 (= ハンナ) の知り合いだったので、
イエスとともに
祭司長の屋敷 (の中庭) に入っていた。
一方、ペテロは門の外で立っていた。
すると、その (先ほどの) 弟子、
祭司長の知り合いであった彼が
出てきて、門番女と話して、
ペテロを中に導いた。
その時、その門番をしている下女が
ペテロに言った。

「あなたもまた、
あの人の弟子の一人ではありませんか？」

ペテロは言った。

「私はそうではない」

そこには下僕たちや従者たちが立っていて、
炭火をおこして
(寒かったからである) 暖まっていた。
ペテロも
彼らの側で暖まっていた。
さて、祭司長ハンナは、イエスに、
彼の弟子たちや彼の教えについて問うた。
イエスは彼に答えて言った。

「私は自由に、公然と世に対して話してきた。
私はいつも教えていたではないか、
講堂や神殿、
ユダヤ人たちが集まる場所で。
隠れた場所では何も話してこなかった。 verbergen ～を隠す
(なのに) お前たちは私に何を問うのか？
それを聞いた人たちに問え、
私が彼らに何を語ってきたか！
見よ、
その人たちは私が何を語ってきたか知っている。」

イエスがこう言った時、
彼の隣に立っていた従者の一人が、
イエスに平手打ちを食らわせ言った。

「お前は祭司長に対して
そのような答え方をしてよいのか？」

イエスは答えた。

「私が悪いことを言ったというなら、
何が悪いのか証明せよ。
しかし私が正しいことを言ったのなら、
なぜ私を打つのか？」

Wer hat dich so geschlagen, 誰が [完] あなたを そのように 打った	誰があなたをこのように打ったのですか。
mein Heil, und dich mit Plagen 私の 救いよ あなたを ~で 苦しみ	我が救いよ、誰があなたを苦しみでもって、
so übel zugericht'?' そんなに 悪い ひどい目にあわせた	そんなにもひどい目に合わせたのですか？ <small>※4格 übel zurichten(～を酷い目にあわせる)</small>
Du bist ja nicht ein Sünder あなたは ~ではない 罪人	あなたは決して罪人ではありません、
wie wir und unsre Kinder, ~のように 我々 我々の 子供ら	私たちや、私たちの子供らのように。
von Missetaten weißt du nicht. ~について 悪事 知る あなたは ~ない	あなたは悪事について何も知らないのです。 <small>※ von etw wissen(～について知っている)</small>
Ich, ich und meine Sünden, 私 私 と 私の 罪(複数)	私です。私と、私の罪、
die sich wie Körnlein finden [関代] ~のように 小さい粒 見いだされる	その罪は、たくさん見いだされます、
des Sandes an dem Meer, 砂の(2格→ Körnlein) 海辺の	海辺の小さな砂粒のように (たくさん) 、
die haben dir erregt [関代][現完] あなたに 引き起こした[完分]	それらが、あなたに対して引き起こしたのです、 <small>※「それら」は1行目の「私と私の罪」</small>
das Elend, das dich Schläget, 不幸 [関代] あなたを 打つ	あなたを打つ不幸を、
und das betrübte Marterheer. 悲しむべき 多くの拷問	悲しむべき多くの拷問を。 <small>※ Marter 拷問、Heer 群</small>

※第3節はマタイ受難曲でも、イエスがユダヤ人たちに殴られる場面で歌われる(第37曲)。

Nr.11+ アリア(バス)&コラール(ソプラノ)

Himmel reiße, Welt erbebe,
fällt in meinen Traueron,
sehst meine Qual und Angst,
was ich, Jesu, mit dir leide!
Ja, ich zähle deine Schmerzen
o zerschlagner Gottessohn,
ich erwähle Golgatha
vor dies schnöde Weltgebäude.
Werden auf den Kreuzeswegen
deine Dornen ausgesät,
weil ich in Zufriedenheit
mich in deine Wunden senke,
so erblick ich in dem Sterben,
wenn ein stürmend Wetter weht,
diesen Ort, dahin ich mich täglich
durch den Glauben lenke.

第2稿で追加、その後削除

天は裂けよ、この世は震えよ、
私の悲しみの声の中へ崩れ落ちよ、
私の苦痛と不安を見よ、
私が、イエスよ、あなたと共に苦しんでいるのを(見よ)！
そう、私はあなたの苦痛を一つ一つ想起します、
おお、打ち砕かれた神の子よ、 zählen 数える
私はゴルゴタのほうを選びます、
この下劣な世界の体系よりも。 Gebäude 建物・構造
十字架の道には
あなたの茨がばら撒かれています、
私が満足のうちに
自らを、あなたの傷の中に沈めるために、
だから私は、死の中で見つめます、
嵐が吹き荒れる天候であっても、
この場所を、私が日々
信仰を通じて向かうべき目的地として。

Jesu, deine Passion

イエスよ あなたの受難は

ist mir lauter Freude,

私にとって 公然の 喜び

deine Wunden, Kron und Hohn

あなたの 傷 冠 嘲り

meines Herzens Weide.

私の 心の 餌場・牧場

Meine Seel auf Rosen geht,

私の 魂 ~へバラ 向かう

wenn ich dran gedenke,

~の時 私が それについて 思い出す

in dem Himmel eine Stätt

~において 天国 場所を

mir deswegen schenke!

私に それ故に 贈ってください

イエスよ、あなたの受難は

私にとって公然の喜びです。

あなたの傷、冠、嘲りは

私の心の牧場です。

私の魂はバラ園へと向かいます、

私がそのこと(イエスの受難)を思い出す時には、

ですから、天国において居場所を

私に贈ってください。

Nr.12a (18:24-25)

福音史家 : Und Hannas sandte ihn gebunden
zu dem Hohenpriester Kaiphas.
Simon Petrus aber stund und wärmete sich.
Da sprachen sie zu ihm:

ハンナはイエスを縛った状態のまま
大祭司カイファのところへ送った。
シモン・ペテロは立って暖まっていた。
そこで人々は彼に言った。

Nr.12b (18:25) 【合唱】ユダヤ人たち

Bist du nicht seiner Jünger einer?

「お前は彼の弟子の一人ではないのか？」

Nr.12c (18:25-27)

福音史家 : Er leugnete aber und sprach:

ペテロは否認して言った。

ペテロ : Ich bin's nicht.

「私はそうではない」

福音史家 : Spricht des Hohenpriesters Knecht' einer,
ein Gefreundter des,
dem Petrus das Ohr abgehauen hatte:

大祭司の下僕の一人も言う。
彼は、
ペテロに耳を切り落とされた者の身内である。
※ gefreundet 身内の

下僕 : Sahe ich dich nicht im Garten bei ihm?

「私はお前が園で彼の側にいるのを見たんだが？」

福音史家 : Da verleugnete Petrus abermal;
und alsobald krähete der Hahn.

ここでペテロが再び否認すると、
すぐに鶏が鳴いた。

(マタイ福音書 26:75)

第3稿で削除されるが、総譜・第4稿で復活

Da gedachte Petrus an die Worte Jesu
und ging hinaus und weinete bitterlich.

この時、ペテロはイエスの言葉を思い出し、
外へ出て、痛ましく泣いた。

※マタイ 26:75 では上2行の間に 「da er zu ihm sagte: Ehe der Hahn krähen wird, wirst du mich dreimal verleugnen.」が入る。
イエスは彼にこう言ったのだった。「鶏が鳴く前に、お前は3度私を否定するだろう」と。

※ヨハネ福音書でイエスがこの予言をするのは、受難曲の物語(第18・19章)が始まるよりずっと前、第13章の晩餐後の場面である。
そして「ペテロの否認」はハンナ邸で1回、カイファ邸で2回、合計3回という記載になっている。

Nr.13 アリア (テノール)

第1・4稿&総譜

※シューマン 1851年編曲ではソプラノが歌う

Ach, mein Sinn,
 wo willst du endlich hin,
 wo soll ich mich erquicken?
 Bleib ich hier,
 oder wünsch ich mir
 Berg und Hügel auf den Rücken?
 Bei der Welt ist gar kein Rat,
 und im Herzen
 stehn die Schmerzen meiner Missetat,
 weil der Knecht den Herrn verleugnet hat.

ああ、私の意識よ、
 お前は最終的にはどこへ向かうのか？
 私はどこで元気を回復すればよいのか？
 私はここに留まるのか？
 それとも私は自ら願うべきなのか
 山と丘を背負うことを？ Rücken 背中
 この世には全く助言はなく、
 心には、
 私の罪業の痛みがある。
 下僕が主を否認したからである。

Nr.13-II アリア (テノール)

第2稿のみ (第3稿はさらに別の失われたアリア)

Zerschmettert mich,
 ihr Felsen und ihr Hügel,
 wirf Himmel deinen Strahl auf mich!
 Wie freventlich,
 wie sündlich, wie vermessen,
 hab ich, o Jesu, dein vergessen!
 Ja, nähm ich gleich
 der Morgenröte Flügel,
 so holte mich
 mein strenger Richter wieder;
 ach! fällt vor ihm
 in bittern Tränen nieder!

私を粉々に打ち砕け、
 岩山よ、丘よ
 天よ、私に汝の電光を投げつけよ！
 何と邪悪な、
 何と罪深い、何と向こう見ずなことでしょう、
 私が、おお、イエスよ、あなたのことを忘れ去っていたとは！
 そう、たとえ私が
 朝焼けの赤い翼を身につけ(飛んで行っ)たとしても、
 私を再び連れ戻すでしょう、
 我が厳格な裁判官は。
 ああ、彼の前にひざまずけ、
 苦い涙とともに！

Nr.14 コラール

パウル・シュトックマン「Jesu Leiden, Pein und Tod」第10節

Petrus, der nicht denkt zurück,
ペテロは [関代] ~しない 想起する zurück_denken
 seinen Gott verneinet,
彼の 神を 否定する
 der doch auf ein' ernsten Blick
[関代] だが ~によって auf~4格
 bitterlichen weinet.
痛ましく 泣く
 Jesu, blicke mich auch an,
イエスよ 注視せよ 私を も an_blicken
 wenn ich nicht will büßen;
もし~なら 私が ~ない 悔い改める
 wenn ich Böses hab getan,
もし~なら 私が 悪事を [完] 行った
 rühre mein Gewissen !
動かせ 私の 良心を

ペテロは、(イエスの言葉を)想起することなく、
 彼の神を否定する、
 だが、(主の)真剣な眼差しによって、
 痛ましく泣く。
 イエスよ、私にも眼差しを注いでください。
 もし私が悔い改めようとしなければ、
 もし私が悪事を行ったなら、
 私の良心を揺り動かしてください！

このコラールは第1・2・4稿&総譜ではイ長調だが、第3稿のみ長調になっている(第12番の失われたアリアとの関係か)。

ここで第1部が終結する。

つまり、「ヨハネ受難曲」と称しているながら、ヨハネ福音書には存在しない「ペテロが泣いた」というマタイ福音書からの挿入記事とそれを踏まえたアリア・コラールで第1部が終わるのである。

第2部

Nr.15 コラール

ミハエル・ヴァイセ「Christus, der uns selig macht」第1節

Christus, der uns selig macht,

キリストは [関代] 我らを 幸い ~する

kein Bö's' hat begangen,

~ない 悪事を [完] ~を犯す begehen 完分

der ward für uns in der Nacht

[関代][受,過] 我らのため 夜

als ein Dieb gefangen,

~のように 泥棒 捕らえられた[完分]

geführt für gottlose Leut'

連行された ~の前へ 神を畏れぬ 人々

und fälschlich verklaget,

偽りの 訴えられた

verlacht, verhöhnt und verspeit,

嘲笑された 嘲弄された 唾を吐かれた※

wie denn die Schrift saget.

~のように すなわち 書物が 言う

私たちが幸いにして下さるキリストは

何も悪事を犯さなかったのに、

私たちのために、夜

まるで盗人のように捕らえられ、

als ob ~まるで~のように

神を畏れぬ人々の前に引き出され、

この für は vor と同義、~の前へ Leute 人々

偽りの罪で訴えられ、

嘲笑され、弄ばれ、唾を吐きかけられた、

※ verspeien は辞書に無い、speien 唾を吐く [完分は gespien]

すなわち書物が語っているように。

Nr.16a (18:28-30)

福音史家 : Da führten sie Jesum von Kaipha vor das Richthaus, und es war frühe. Und sie gingen nicht in das Richthaus, auf dass sie nicht unrein würden, sondern Ostern essen möchten. Da ging Pilatus zu ihnen heraus und sprach:

ピラト : Was bringet ihr für Klage wider diesen Menschen?

福音史家 : Sie antworteten und sprachen zu ihm:

人々はイエスをカイファの所から総督官邸へ連れて行った。早朝のことだった。人々は官邸に入らなかった。というのは、彼らは汚れることなく、過越の食事をしたかったからである。そこで総督ピラトは彼らの所へ出てきて言った。

「何の罪で、お前たちは、この男に対して訴えをなすのか？」

彼らは総督に答えて言った。

Nr.16b (18:30) 【合唱】ユダヤ人たち

Wäre dieser nicht ein Übeltäter, wir hätten dir ihn nicht überantwortet.

「この者が犯罪者でなかったら、我々は彼をあなたに引き渡ししたりしない。」

Nr.16c (18:31)

福音史家 : Da sprach Pilatus zu ihnen:

ピラト : So nehmet ihr ihn hin und richtet ihn nach eurem Gesetze!

福音史家 : Da sprachen die Jüden zu ihm:

ピラトは彼らに言った。

「それなら、お前たちが彼を引き取って、お前たちの律法に従って彼を裁け！」

するとユダヤ人たちはピラトに言った。

Nr.16d (18:31) 【合唱】ユダヤ人たち

Wir dürfen niemand töten.

「我々は何人をも殺すことが許されていない。」

※律法が許さないのではなく、ローマの属州だったため、死刑相当の重大犯罪については総督に裁判権があったということ。

当初ピラトは、イエスが死刑に相当するとは思わなかったから、「お前たちで裁け」と言ったのである。(しかしこれは福音書著者の設定である。)

Nr.16e (18:32-36)

福音史家 : Auf dass erfüllet würde das Wort Jesu,
welches er sagte, da er deutete,
welches Todes er sterben würde.
Da ging Pilatus wieder hinein in das Richthaus
und rief Jesu und sprach zu ihm:

ピラト : Bist du der Jüden König?

福音史家 : Jesus antwortete:

イエス : Redest du das von dir selbst,
oder haben's dir andere von mir gesagt?

福音史家 : Pilatus antwortete:

ピラト : Bin ich ein Jude?
Dein Volk und die Hohenpriester
haben dich mir überantwortet;
was hast du getan?

福音史家 : Jesus antwortete:

イエス : Mein Reich ist nicht von dieser Welt.
Wäre mein Reich von dieser Welt,
meine Diener würden darob kämpfen,
dass ich den Jüden nicht überantwortet würde;
aber nun ist mein Reich nicht von dannen.

それはイエスの言葉が果たされるためであった、
彼は語って示していたのである、
自分がどのように死ぬかを。
そこでピラトは再び官邸の中に入り、
イエスを呼んで彼に言った。 ※ここでイエスは官邸内に入る

「お前はユダヤ人の王なのか？」

イエスは答えた。

あなたは自分自身でそう言っているのか、
それとも誰か別の者が私について、あなたにそう言ったのか？

ピラトは答えた。

「私がユダヤ人であるはずないだろ？
お前の民族と祭司長たちが、
お前を私に引き渡したのだ。
お前は何をしたのか？」

イエスは答えた。

「私の国はこの世のものではない。
もし私の国がこの世のものだったならば、
私の従者たちが戦って
私がユダヤ人に引き渡されないようにするだろう。
しかし今は、私の国はここには無い。」

Nr.17 コラール

詞 : ヨハン・ヘルマン「Herzliebster Jesu」第8・9節、 旋律 : ヨハン・クリューガー

Ach großer König, groß zu allen Zeiten, ああ 偉大な 王 偉大な ~に 全ての 時	ああ偉大な王よ、いつの世にも偉大なる王よ、
wie kann ich g'nugsam diese Treu ausbreiten? 如何に できる 私は 十分に この 真実 教え広める	どうすれば私はこの真実を十分に広められるだろう？
Kein's Menschen Herze mag indes ausdenken, どの人の(2格~も~ない) 心は ~できる しかし 思いつく	しかし、いかなる人の心も、思いつくことができません、 indes=indessen=jedoch しながら
was dir zu schenken. 何を あなたに 贈る	何をあなたに贈るべきか、を。
Ich kann's mit meinen Sinnen nicht erreichen, 私は ~できる ~で 私の 思案 ~ない 到達する	私は自分の思慮をもって思い至ることができません、
womit doch dein Erbarmen zu vergleichen. 何をもって だが あなたの 憐れみと[4格] [4格と]比較する	何をもって、あなたの憐れみと比較するか、を。 womit ← mit was
Wie kann ich dir denn deine Liebestaten どんな ~できる 私は あなたに あなたの 愛の行為[4格]	私はあなたの愛の行為に対して、
im Werk erstatten ? 仕事で[3格] [3格で4格を]返済する	どんな所業によって報いることができるのでしょうか？

Nr.18a (18:37-40)

福音史家 : Da sprach Pilatus zu ihm:

ピラト : So bist du dennoch ein König?

ピラトはイエスに言った。

「それではやはりお前は王なのか？」

福音史家 : Jesus antwortete:

イエスは答えた。

イエス : Du sagst's, ich bin ein König.*
Ich bin dazu geboren
und in die Welt kommen,
dass ich die Wahrheit zeugen soll.
Wer aus der Wahrheit ist,
der höret meine Stimme.

「あなたがそう言っている、(その通り) 私は王である。*
私生まれ、
この世に来たのは、
真理を示すためである。
真理からの者は
私の声を聞く。」

※この最初の行、聖書のギリシア語原文は「私が王だということは、あなたが言っていることだ」となっている。

つまり、正しいドイツ語訳は、dass 節を用いて、Du sagst's, dass ich ein König bin.としなくてはならない。

第 16 曲の場面では、ピラトはイエスに「ユダヤ人の王なのか」と問うていたが、この第 18 曲では単に「王なのか」と問うている。

それをいいことに、ルターはここでイエスの口から「王である」と言わせたくて、意図的誤訳を行ったのである。

この「ルターによる意図的誤訳のドイツ語」を、“正しく翻訳”するならば、上記のようにせざるを得ない。

なおこの「Du sagst's 問題」については巻末で詳述する。

福音史家 : Spricht Pilatus zu ihm:

ピラトはイエスに言う。

ピラト : Was ist Wahrheit?

「真理とは何か？」

福音史家 : Und da er das gesaget,
ging er wieder hinaus zu den Jüden
und spricht zu ihnen:

ピラトはこう言うと、
再びユダヤ人の所に出て行った。
そして彼らに言う。

ピラト : Ich finde keine Schuld an ihm.
Ihr habt aber eine Gewohnheit,
dass ich euch einen losgebe;*
wollt ihr nun,
dass ich euch der Jüden König losgebe?

「私は彼に何の罪も見いださない。
ところで、お前たちには次のような慣習がある、それは
私がお前たちに(過越にあたって*)一人釈放してやる、というものだ。
今、お前たちは、
私がお前たちにユダヤ人の王を釈放してやることを望むか？」

※聖書原文では「過越にあたって」が入る。ルター訳では losgebe の前に auf Ostern が入る。これはバツハによる省略である。

福音史家 : Da schrienen sie wieder allesamt
und sprachen:

するとユダヤ人たちは再び、一人残らず
叫んで言った。

Nr.18b (18:40) 【合唱】全群衆

Nicht diesen, sondern Barrabam!

「この者ではなくてバラバを！」

Nr.18c (18:40-19:1)

福音史家 : Barrabas aber war ein Mörder.
Da nahm Pilatus Jesum und geißelte ihn.

バラバとは殺人者だった。
そこでピラトはイエスを捕らえて、鞭で打った。

※この 1 行目がヨハネ第 18 章最終節、2 行目が第 19 章第 1 節である。内容的にも連続性はない。

まだ裁判をしていないのに、ピラトがイエスを鞭打たせたり、兵士たちがイエスを嘲ったりする(第 21 曲)のは不自然である。

実は、第 19 章 1-3 はヨハネ著者が、マルコ福音書第 15 章 15-19 の裁判が終わった後の出来事を引き写して書いているので、おかしいことになってしまっているのである。

また、ヨハネ福音書の記述の流れとしても、イエスは官邸内にいるので、ここでピラトがいったん邸内に入り、そこで鞭打たせたのである。

しかしヨハネ受難曲の台本作者は、ここを繋げることによって、あたかも群衆の前で鞭打ちが行われたかのように錯覚させる効果を狙っている。

鞭打ちを受けての第 19・20 曲に繋げるためである。

Nr.19 アリオート (バス) 第1・3稿 & 総譜

Betrachte, meine Seel,
mit ängstlichem Vergnügen,
mit bitterer Lust
und halb beklemmtem Herzen
dein höchstes Gut in Jesu Schmerzen,
wie dir auf Dornen, so ihn stechen,
die Himmelschlüsselblumen blühn!
Du kannst viel süße Frucht
von seiner Wermut brechen,
drum sieh ohn' Unterlass auf ihn!

よく見るのだ、わが魂よ、
おどおどした楽しみや
悲痛な願望、
そして半ば締め付けられた心をもって、
イエスの苦しみの中にある最高の財宝を(見よ)。
彼(イエス)を刺す茨の上に
汝のために“天国への鍵の花”が咲く様子を(見よ)！
汝は多くの甘い果実を
彼のニガヨモギ(=苦しみ)から摘むことができるのだ。
だから、間断無く彼を仰ぎ見よ！

Nr.20 アリア (テノール) 第1・3稿 & 総譜

Erwäge, wie sein blutgefärbter Rücken
in allen Stücken
dem Himmel gleiche geht,
daran, nachdem die Wasserwogen
von unsrer Sündflut sich verzogen,
der allerschönste Regenbogen
als Gottes Gnadenzeichen steht!

考えてみよ、いかに、血に染められた主の背中が
全ての部分において
天国に等しい様であるかを、
そこには、 Sintflut=Sintflut =ノアの洪水、Woge = 大波
我々の罪による洪水からの大波が消え去った後に、
これ以上無い美しい虹が
神の恩寵の徴としてかかっている！

※第19・20曲は「プロックス受難曲」の歌詞を下敷きしている。プロックスでも場面は同じ、イエス鞭打ちの場面を受けての曲である。

第19曲はプロックス第32曲 a 前半をほぼ引用。第20曲もプロックス第32曲 b から「血に染まったイエスの背中 = 虹がかかった天」という
比喩表現をそのまま使用している。

Nr.19-IV アリオート (バス) 第4稿 (若干の歌詞変更)

Betrachte, meine Seel,
mit ängstlichem Vergnügen,
mit bitterer Lust
und halb beklemmtem Herzen
dein höchstes Gut in Jesu Schmerzen.
Sieh hier auf Ruten, die ihn drängen,
vor deine Schuld den Isop blühn
und Jesu Blut auf dich
zur Reinigung versprengen,
drum sieh ohn' Unterlass auf ihn!

よく見るのだ、わが魂よ、
おどおどした楽しみや
悲痛な願望、
そして半ば締め付けられた心をもって、
イエスの苦しみの中にある最高の財宝を(見よ)。
見よここに、彼を責め立てる枝の鞭の上に、 dräng=dringen 接2
汝(=わが魂)の罪のためにイソブが花咲くのを、
そして、イエスの血が汝の上に
浄化のためにとび散らされるのを、
だから、間断無く彼を仰ぎ見よ！

Nr.20-IV アリア (テノール) 第4稿 (全面的歌詞変更、曲は同じ)

Mein Jesu, ach!
dein schmerzhaft bitter Leiden
bringt tausend Freuden,
es tilgt der Sünden Not.
Ich sehe zwar mit vielen Schrecken
den heiligen Leib mit Blute decken;
doch muss mir dies auch Lust erwecken,
es macht mich frei von Höll und Tod.

私のイエスよ、ああ！
あなたの痛く辛い受難が
多くの喜びをもたらしてくれます、
それが罪の苦しみを消し去ってくれるのです。
私は確かに多くの恐怖をもって見えています、
血に覆われた聖なる御身体を。
だがこの事は私に喜びをも呼び覚ますに違いありません、
それは私を地獄と死から自由にしてくれるのですから。

※シューマン 1851年編曲では、この第4稿の歌詞でソプラノが歌う

Nr.19-II アリア (テノール)

第2稿では第19 & 20曲に代えて、別曲のこのアリアに差し替えられている

Ach windet euch nicht so, geplagte Seelen,
bei eurer Kreuzesangst und Qual!
Könnt ihr die unermessne Zahl
der harten Geißelschläge Zählen,
so zählet auch die Menge eurer Sünden,
ihr werdet diese größer finden!

ああ、そんなにのたうつな、苦しめられた魂たちよ、
おまえたちの十字架の不安と苦悩の傍らで！
おまえたちが、数え切れないほどの
厳しい鞭打ちの数を、数えることができるというなら、
おまえたちの罪の数を数えてみよ、
より多くの数、見つけることになるだろう！

ermessen 数える unermesslich 無数の (短母音なので正書法ではßは使わない)

Nr.21a (19:2-3)

福音史家 : Und die Kriegsknechte
flochten eine Krone von Dornen
und satzten sie auf sein Haupt
und legten ihm ein Purpurkleid an
und sprachen:

兵士たちは
茨の王冠を編んで、
イエスの頭にかがせ、
紫の衣を着せて、
言った。

Nr.21b (19:3) 【合唱】兵士たち**Sei begrüßet, lieber Jüdenkönig!**

「ごきげんよう、愛するユダヤ人の王よ！」

Nr.21c (19:3-6)

福音史家 : Und gaben ihm Backenstreiche.
Da ging Pilatus wieder heraus
und sprach zu ihnen:

そしてイエスに平手打ちを食らわせた。
ピラトは再び外へ出て
彼らに言った。

ピラト : Sehet, ich führe ihn heraus zu euch,
dass ihr erkennet,
dass ich keine Schuld an ihm finde.

「見よ、私は彼を、外に、お前たちの前に連れ出す。
それは、お前たちが認識するためである、
私が彼に何の罪も見いだしていない、ということ。」

福音史家 : Also ging Jesus heraus
und trug eine Dornenkrone und Purpurkleid.
Und er sprach zu ihnen:

こうしてイエスは外へ出てきたが、
茨の王冠と紫の衣はつけたままだった。
ピラトは彼らに言った。

ピラト : Sehet, welch ein Mensch!

「見よ、この人がどんなであるか！」

※ギリシア語原文は「見よ、この人」。ラテン語では定冠詞が無いので「Ecce homo(エッケ・ホモ)」。英語欽定訳は「Behold the man!」。

本来はイエスがユダヤ人たちの前に引き出された場面だが、中世美術においては茨冠・紫衣・鞭打ち・嘲笑の場面も含めた描写が「エッケ・ホモ」と呼んだ。(15世紀以降は本来の傷ついたイエス像のみの描写となる。)

ピラトは、惨めな状態のイエスを見せ「こんな彼を処刑しても意味ないだろう」と言って、処刑を回避しようとしたのだ、と磯山氏は解釈されている。

福音史家 : Da ihn die Hohenpriester
und die Diener sahen,
schrienen sie und sprachen:

祭司長たちや
従者たちはイエスを見て、
叫んで言った。

Nr.21d (19:6) 【合唱】全群衆**Kreuzige , kreuzige!**

十字架につけよ、十字架につけよ！

Nr.21e (19:6-7)

福音史家 : Pilatus sprach zu ihnen:

ピラトは彼らに言った。

ピラト : Nehmet ihr ihn hin und kreuziget ihn;
denn ich finde keine Schuld an ihm.

「お前たちが彼を連れて行き、十字架につければよい。
私は彼に何の罪も見いだせないのだから。」

福音史家 : Die Jüden antworteten ihm:

ユダヤ人たちはピラトに答えた。

Nr.21f (19:7) 【合唱】ユダヤ人たち

**Wir haben ein Gesetz,
und nach dem Gesetz soll er sterben;
denn er hat sich selbst
zu Gottes Sohn gemacht.**

「我々は律法を持っている。
そして律法によれば彼は死ぬべきである。
なぜなら、彼は自分を
神の子と称したのだから。」

Nr.21g (19:7-11)

福音史家 : Da Pilatus das Wort hörete,
fürchtet' er sich noch mehr
und ging wieder hinein in das Richthaus
und spricht zu Jesu:

ピラトはこの言葉を聞くと、
より一層恐れて
再び官邸の中に入り、 ※イエスも一緒に邸内に入る
イエスに言う。

ピラト : Von wannen bist du?

「お前はどこから来たのか？」

福音史家 : Aber Jesus gab ihm keine Antwort.
Da sprach Pilatus zu ihm:

しかしイエスは何も答えなかった。
そこでピラトはイエスに言った。

ピラト : Redest du nicht mit mir?
Weißest du nicht,
dass ich Macht habe, dich zu kreuzigen,
und Macht habe, dich loszugeben?

お前は私に何も言わないのか？
お前は知らないのか？
私はお前を十字架につける権限も、
お前を解放してやる権限も持っているのだ、ということ。

福音史家 : Jesus antwortete:

イエスは答えた。

イエス : Du hättest keine Macht über mich,
wenn sie dir nicht wäre
von oben herab gegeben;
darum, der mich dir überantwortet hat,
der hat's größ're Sünde.

「あなたは私について何の権限も持っていない。
もしその権限があなたに ※ sie=Macht
天から下賜されたものでなければ。 ※ oben 上・天、herab 下へ
だから、私をあなたに引き渡した者、
その者にはより大きな罪がある。」

福音史家 : Von dem an trachtete Pilatus,
wie er ihn losließe.

この会話以後、ピラトは ※ von ~ an、~から(開始の時点を表す)
どうにかしてイエスを解放しようと努めた。

Nr.22 コラール

詞 : クリスマス・ハインリヒ・ポステル作のARIA詩

旋律 : ヨハン・ヘルマン・シャイン作のコラール「Mach's mit mir, Gott, nach deiner Güt」

Durch dein Gefängnis, Gottes Sohn,

神の御子よ、あなたが捕らわれたことにより、

~により あなたの 投獄 神の 子よ

Gefängnis = 本来は「牢獄」の意

muss uns die Freiheit kommen;

我らに自由がもたらされるに違いありません。

~に違いない 我らに 自由が 到来する

Dein Kerker ist der Gnadenthron,

あなたの牢獄は、恩恵の玉座であり、

あなたの 牢獄は 恩恵の玉座

die Freistatt aller Frommen;

全ての敬虔な人々の隠れ家です。

避難所・隠れ家 全ての 敬虔な人々の

denn gingst du nicht die Knechtschaft ein,

そもそも、あなたが奴隷契約義務を負って下さらなかつたら、

そもそも 契約義務を負わなければ 奴隷的状态 ~に入る

ein|gehen 契約関係に入ることに同意する(契約義務を負う)

müsst unsre Knechtschaft ewig sein.

我らの奴隷状態は永遠だったに違いないのです。

~に違いない 我々の 奴隷的状态は 永遠で

※以前はヘンデル作とされていたが、現在はゲオルク・ベームの作と考えられている「ヨハネ受難曲」の台本を書いたのがポステルである。
このポステル&ベームの「ヨハネ受難曲」において同じ場面に置かれたソプラノ・アリアの詩を、バッハはシャイン作のコラール旋律に当てはめて
コラールとして扱った。

Nr.23a (19:12)

福音史家 : Die Jüden aber schrieen und sprachen:

しかしユダヤ人たちは叫んで言った。

Nr.23b (19:12) 【合唱】ユダヤ人たち

**Lässest du diesen los,
so bist du des Kaisers Freund nicht;
denn wer sich zum Könige machet,
der ist wider den Kaiser.**

「この者を解放するならば、
あなたは皇帝の友ではない。
自ら王と称する者は、
皇帝に逆らっているのだから。」

Nr.23c (19:13-15)

福音史家 : Da Pilatus das Wort hörete,
führte er Jesum heraus
und satzte sich auf den Richtstuhl,
an der Stätte, die da heißet : Hochpflaster,
auf Ebräisch aber : Gabbatha.
Es war aber der Rüsttag in Ostern
um die sechste Stunde,
und er spricht zu den Jüden:

ピラトはこの言葉を聞くと、
イエスを外に連れ出し、
自分も裁判の席についた。
その場所は「高い敷石」、
ヘブライ語で「ガバタ」といった。
それは過越の準備の日の
第六時（昼の十二時）だった、
ピラトはユダヤ人たちに言う。

ピラト : Sehet, das ist euer König!

「見よ、これがお前たちの王だ！」

福音史家 : Sie schrieen aber:

しかし彼らは叫んだ。

Nr.23d (19:15) 【合唱】ユダヤ人たち

Weg, weg mit dem, kreuzige ihn!

weg mit ~をどけろ!

「その者を去らしめよ、彼を十字架につけよ！」

Nr.23e (19:15)

福音史家 : Spricht Pilatus zu ihnen:

ピラトは彼らに言う。

ピラト : Soll ich euren König kreuzigen?

「私がお前たちの王を十字架につけてよいのか？」

福音史家 : Die Hohenpriester antworteten:

祭司長たちは答えた。

Nr.23f (19:15) 【合唱】祭司長たち

Wir haben keinen König denn den Kaiser. 「我々には王はいない、なぜなら皇帝を戴いているから。」

Nr.23g (19:16-17)

福音史家 : Da überantwortete er ihn,
dass er gekreuziget würde.
Sie nahmen aber Jesum und führten ihn hin.
Und er trug sein Kreuz und ging
hinaus zur Stätte, die da heißet Schädelstätt,
welche heißet auf Ebräisch : Golgatha.

そこでピラトはイエスを引き渡した、
彼が十字架につけられるために。
彼らはイエスを引き取って連行していった。
イエスは自分の十字架を担いで行き、
「髑髏(されこうべ)の場所」という場所へと向かった。
そこはヘブライ語で「ゴルゴタ」という。

Nr.24 アリア (バス) & 【合唱】

Eilt, ihr angefochtenen Seelen,
geht aus euren Marterhöhlen,
Eilt — Wohin ? — nach Golgatha !
Nehmet an des Glaubens Flügel,
flieht — Wohin ?
— zum Kreuzeshügel,
eure Wohlfahrt blüht allda !

急げ、汝ら、悩める魂たちよ、 an|fechten 心配させる
汝らの呵責の洞窟から出よ。 aus|gehen (考えなどから)出る
急げ — どこへ? — ゴルゴタへ!
信仰の翼を受け入れよ an|nehmen 受け取る、(教義を)受け入れる
飛べ — どこへ?
— 十字架の丘へ。 hügel 小高い丘
汝らの幸福・繁栄は、そこでこそ花咲くのだ!

Nr.25a (19:18-21)

福音史家 : Allda kreuzigten sie ihn
 und mit ihm zween andere zu beiden Seiten,
 Jesum aber mitten inne.
 Pilatus aber schrieb eine Überschrift
 und satzte sie auf das Kreuz;
 und war geschrieben:
 "Jesus von Nazareth, der Jüden König."
 Diese Überschrift lasen viel Jüden,
 denn die Stätte war nahe bei der Stadt,
 da Jesus gekreuziget ist.
 Und es war geschrieben auf ebräische,
 griechische und lateinische Sprache.
 Da sprachen die Hohenpriester der Jüden
 zu Pilato:

その場所で、彼らはイエスを十字架につけた、
 彼とともに他の2人を両脇に、
 そしてイエスを中央に。
 ピラトは表書きを書いて、
 それを十字架の上に掲げた。
 それにはこう書いてあった。
 『ナザレのイエス、ユダヤ人の王』と。
 この表書きは多くのユダヤ人たちが読んだ。
 なぜなら、イエスが十字架に架けられた場所は、
 市街地に近かったからである。
 また、その表書きは、ヘブライ語、
 ギリシア語、そしてラテン語で書かれていた。
 そこでユダヤの祭司長たちは
 ピラトに言った。

Nr.25b (19:21) 【合唱】 祭司長たち

**Schreibe nicht: der Jüden König,
 sondern dass er gesaget habe:
 Ich bin der Jüden König.**

「『ユダヤ人の王』と書くな。
 そうではなくて、
 『彼は、私がユダヤ人の王だ、と言っていた』と書け。」

Nr.25c (19:22)

福音史家 : Pilatus antwortet:

ピラトは答える。

ピラト : Was ich geschrieben habe,
 das habe ich geschrieben.

「私が書いたものは、
 私が書いたことだ。(その通りにしておけ。)」

※ここまで「ピラトはイエスの処刑に消極的だった」と書かれているが、これは4つの福音書に共通した設定である。帝国によって処刑された人物が
 教祖であるということは、帝国内で存在を承認してもらいたい初期教会にとっては死活問題だった。しかし、十字架刑はローマの処刑方法であり、
 その宣告はピラトが行ったのである。イエスはユダヤ教だけでなく帝国社会全般を批判していたのだから、総督としても当然の死刑宣告だった。

Nr.26 コラール

詞 : ヴァレリウス・ヘルベルガー 「Valet will ich dir geben」第3節 旋律 : メルヒオール・テシュナー

In meines Herzens Grunde,

私の 心の 底・基礎

わたしの心の奥底には、

dein Nam und Kreuz allein

あなたの 名前 十字架 ~だけが

あなたの御名と十字架だけが、

funkelt all Zeit und Stunde,

輝く 全ての 時 と 時

いつもどんな時も輝いています。

drauf kann ich fröhlich sein.

それで できる 私は 喜んで

それで私は喜んでいられます。

drauf=darauf その上に、それに応じて

Erschein mir in dem Bilde

現す(3格) 私に 姿を

私に姿を現してください、

zu Trost in meiner Not,

慰め 私の 苦しみ

苦しむ私の慰めとして、

wie du, Herr Christ, so milde

どのように あなたが そんなに 穏やかに

主キリストよ、どのようにあなたが、そんなにも穏やかに

dich hast geblut' zu Tod!

血を流した 死

死に至るまで血を流された姿を(現してください)。

sich4 zu Tode bluten 出血多量で死ぬ

Nr.27a (19:23-24)

福音史家 : Die Kriegsknechte aber,
da sie Jesum gekreuziget hatten,
nahmen seine Kleider
und machten vier Teile,
einem jeglichen Kriegsknechte sein Teil,
dazu auch den Rock.
Der Rock aber war ungenähet,
von oben an gewürket durch und durch.
Da sprachen sie untereinander:

さて兵士たちは、
イエスを十字架に架けてしまうと、
彼の衣服をとって
4つに分け、
各々の兵士がその1つずつをとり、
さらに上着も分けようとした。
しかし上着は縫い目がなく、
上から下まで通して一枚で織られていた。

※ gewirket の古形
↑ wirken 織る

※ドイツ語の Rock は「上着」だが、聖書のギリシア語原文は「肌着・下着」となっている。

Nr.27b (19:24) 【合唱】 兵士たち

**Lasset uns den nicht zerteilen,
sondern darum losen, wes er sein soll.**

「これは裂かないで、
くじ引きして、誰のものにするか決めよう。」

Nr.27c (19:24-27)

福音史家 : Auf dass erfüllet würde die Schrift,
die da saget:
"Sie haben meine Kleider unter sich geteilet
und haben über meinen Rock
das Los geworfen."
Solches taten die Kriegsknechte.
Es stund aber bei dem Kreuze Jesu
seine Mutter
und seiner Mutter Schwester,
Maria, Kleophas Weib,
und Maria Magdalena.
Da nun Jesus seine Mutter sahe
und den Jünger dabei stehen,
den er lieb hatte,
spricht er zu seiner Mutter:

これは、書物が果たされるためであった。
それはこう語っている、
『彼らは私の衣を各々に分け、
私の上着については
くじに運命をまかせた』と。
兵士たちはその通りにしたのだった。
さて十字架につけられたイエスの側に立っていたのは、
彼の母、
そして彼の母の姉妹で
クレオファの妻であるマリア、
そしてマグダラのマリアであった。 ※
イエスは今、自分の母と、
その側に立つ
自分の愛する弟子を見て、
母に対して言う。

イエス : Weib, siehe, das ist dein Sohn!

「女よ、見なさい、これはあなたの息子だ！」

福音史家 : Darnach spricht er zu dem Jünger:

その後、イエスはこの弟子に言う。

イエス : Siehe, das ist deine Mutter!

「見よ、これはお前の母だ！」

※イエスの側に立っていた女性は何人だったか。「イエスの母」「彼の母の姉妹でクレオファの妻であるマリア」「マグダラのマリア」の3人である。古代の写本には読点（コンマ）は存在しなかった。「そして」に相当するギリシア語の接続詞 kai を挟んで「A kai BC kai D」とある。B = 彼の母の姉妹、C = クレオファの妻であるマリア、である。古代の読者は、AとBCとDの3人と読んでいた。エラスムもルターも同じように3人と読んでいた。（ルター訳は上記の通りである。）

ところが、近代において次第にA,B,C,Dの4人と読める可能性があると考えられ、BとCの間に勝手にコンマを入れるようになってきた。ギリシア語聖書の底本とされるネストレもその流れで「A kai B, C kai D」として4人説をとっている。だから日本語聖書も、口語訳、共同訳、新共同訳、そして2018年最新訳でも全て「彼の母の姉妹」と「クレオファの妻であるマリア」を別人として訳して4人と解釈している。磯山雅氏の訳も同様である。だが近代の勝手なコンマを抜きにして考えて3人というのが史料の正しい読み方である。

※「イエスの愛する弟子」は、ヨハネ福音書にのみ現れる人物である。第13章-23（晩餐の場面でイエスに寄りかかっている）、第19章-26（上記の場面）、第20章-2（マグダラのマリアが「墓が空だった」とペテロと彼に報告に来る）、第21章-7,20である。教会的解釈では、この人物は十二使徒の一人「ゼベタイの子のヨハネ」であるとされ、第21章-24の記事により、彼がこの福音書の著者とされる。しかし聖書学的には、この人物の実在性そのものが疑わしい。そもそも共観福音書もヨハネ福音書も、特にペテロの書き方を見れば明らかのように、十二使徒に対して批判的な書き方をしている。そこでヨハネ福音書では、彼らとは別に「イエスを理解した人物」を創作した、と考えるべきである。当福音書の著者がこの人物だと記す第21章は、当福音書の原著者の作でもなく、これを改竄した教会的編集者の作でもなく、それよりも後代に付加されたものである、と聖書学では見なされている。彼が「イエスの母」を引き取った、という話については、巻末で別に書く。

Er nahm alles wohl in acht

彼は 全てのことに 十分に 心を配られた

in der letzten Stunde,

～において 最期の 時

seine Mutter noch bedacht,

彼の 母 なおまた 心に掛けた・考慮した

setzt ihr ein' Vormunde,

定めた 彼女に 一人の 後見人を

O Mensch, mache Richtigkeit,

おお 人よ 実行せよ 正しさ・公正・正当

Gott und Menschen liebe,

神を そして 人々を 愛せ

stirb darauf ohn alles Leid,

死ね そうして ～無しに 全ての 苦しみ

und dich nicht betrübe!

～ない 悲しむ sich betrüben

主は全てのことに十分に心を配られた、

et4 in acht nehmen ～に心を配る

最期の時に臨んでも。

また母についても心に掛けられて

auf etw bedacht sein ～を考慮する、～を心に掛ける

その後見人を定められた。

おお人よ、正しい事を行え。

神を、そして人々を愛しなさい。

そうして、死んでいきなさい、あらゆる苦しみもなく、

stirb=sterben の単数命令形

そして悲しむこともなく！

Nr.29 (19:27-30)

福音史家：Und von Stund an
nahm sie der Jünger zu sich.
Darnach, als Jesus wusste,
dass schon alles vollbracht war,
dass die Schrift erfüllet würde, spricht er:

イエス： Mich dürstet!

福音史家：Da stund ein Gefäße voll Essigs.
Sie fülleten aber einen Schwamm mit Essig
und legten ihn um einen Isopen,
und hielten es ihm dar zum Munde.
Da nun Jesus den Essig genommen hatte,
sprach er:

イエス： Es ist vollbracht!

この時から
この弟子は彼女を自分のもとに引き取った。
その後、イエスは
全てが成し遂げられたことを知り、
書物が果たされるために、彼は言う。

「私はのどが渇く！」 ※ = Es dürstet mich.

そこには酢が満たされた容器があった。
彼らは海綿に酢を染みこませると
それをヒソブ(の枝)に付けて、
イエスの口もとに保持した。
イエスは酢を受けると、
言った。

「成し遂げられた！」 vollbringen 成し遂げる、遂行する

Nr.30 アリア (アルト)

Es ist vollbracht!
O Trost vor die gekränkten Seelen!
Die Trauernacht
lässt nun die letzten Stunde zählen.
Der Held aus Juda siegt mit Macht
und schließt den Kampf.
Es ist vollbracht!

成し遂げられた！
おお、病める魂たちに慰めあれ！
悲しみの夜は
今や最後の時を迎えるだけだ。
ユダから出た英雄は力をもって勝利し、
戦いを終えた。
成し遂げられた！

※シューマン 1851年編曲では、「英雄は勝利し」のところで金管が鳴る

Nr.31 (19:27-30)

福音史家：Und neiget das Haupt und verschied.

そして頭を傾け、亡くなった。

Nr.32 アリア（バス）&コラール

Mein teurer Heiland, lass dich fragen,
da du nunmehr ans Kreuz geschlagen
und selbst gesagt : es ist vollbracht,
bin ich vom Sterben frei gemacht?
Kann ich durch deine Pein und Sterben
das Himmelreich ererben?
Ist aller Welt Erlösung da?
Du kannst vor Schmerzen
zwar nichts sagen,
doch neigst du das Haupt
und sprichst stillschweigend: Ja.

我が親愛なる救い主よ、あなたに問わせてください、
今や、あなたは十字架に打ち付けられ、 an|schlagen 打ち付ける
自ら言われました：「成し遂げられた」、と。
私は死から解放されたのでしょうか？
私はあなたの苦痛と死によって
天の国を受け継ぐことができるのでしょうか？
全世界の救済がそこに実現したのでしょうか？
あなたは苦しみのゆえに
確かに何も語ることはできませんが、
しかし、あなたは、頭を傾けて、
沈黙のうちに語っておられます。「そうだ」と。

パウル・シュトックマン「 Jesu Leiden, Pein und Tod 」第 34 節(最終節)

Jesu, der du warest tot,

イエスよ あなたは 死んだ

lebest nun ohn Ende,

生きている 今や ～無しに 終わり

in der letzten Todesnot

～において 最期の 死の苦痛

nirgend mich hinwende

どこにも～しない 私を ～へ向ける

als zu dir, der mich versühnt,

あなたへ 関代 私を あがなう

o du lieber Herre!

あなた 愛する 主よ

Gib mir nur, was du verdient,

与えよ 私に ～だけ 関代 あなたが 得る

mehr ich nicht begehre!

より多く 私は ～ない 望む・求める

イエスよ、あなたは亡くなられましたが、

今や終わり無く生きておられます。

最期の死の苦しみにあるとき

私をあなた以外に向かわせないでください、

あなただけが私をあがなってくださるのですから。

versöhnen 和解させる、sühnen 贖う・償う

ああ、愛する主よ！

私にあなたが得たものだけを下さい、

それより多くは求めません！

Nr.33 (マタイ福音書 27:51-52) 第 2・4 稿 & 総譜

福音史家 : Und siehe da,
der Vorhang im Tempel zerriss in zwei Stück
von oben an bis unten aus.
Und die Erde erbebete,
und die Felsen zerrissen,
und die Gräber täten sich auf,
und stunden auf viel Leiber der Heiligen.

すると見よ、
神殿の垂れ幕が真っ二つに裂けたのだ、
上から下まで。
そして大地が震え、
岩が裂け、
墓が開いて、
多くの聖者たちの体が目覚め立ち上がった。

※マタイ 27:52 では「 viel Leiber der Heiligen, die da schliefen (そこで眠っていた多くの聖者たちの体) 」。

Nr.33- I (マルコ福音書 15:38) 第 1 稿のみ

福音史家 : Und der Vorhang im Tempel
zerriss in zwei Stück
von oben an bis unten aus.

すると神殿の垂れ幕が
真っ二つに裂けたのだ、
上から下まで。

Nr.34 アリオソ (テノール) 第1・2・4稿&総譜

Mein Herz, indem die ganze Welt
bei Jesu Leiden gleichfalls leidet,
die Sonne sich in Trauer kleidet,
der Vorhang reißt, der Fels zerfällt,
der Erde bebt, die Gräber spalten,
weil sie den Schöpfer sehn erkalten,
was willst du deines Ortes tun?

わが心よ、全世界が
ひとしくイエスの受難を悼んでいる間に、
太陽は悲しみの衣をまとい、
垂れ幕は裂け、岩は崩壊し、
大地は揺れ、墓(複数)は割れる。
それらが、創造主が冷たくなるのを見たからである。
(わが心よ)、お前は自分の場所で何を為そうとするのか？

Nr.35 アリア (ソプラノ) 第1・2・4稿&総譜

Zerfließe, mein Herze, in Fluten der Zähren
dem Höchsten zu Ehren!

Erzähle der Welt und dem Himmel die Not:
Dein Jesus ist tot!

溶けて流れ去れ、わが心よ、涙の流れの中へ、
至高者に敬意を！

この世と天に、この苦しみを述べ伝えよ、
「あなたのイエスが死んだ」と！

※第3稿ではマタイ・マルコの引用はしない。

よってそれを受けての第34・35曲もカットし、第33-35曲の代わりに、失われたシンフォニアが演奏された。

Nr.36 (19:31-37)

福音史家 : Die Jüden aber;
dieweil es der Rüsttag war,
dass nicht die Leichname
am Kreuze blieben den Sabbath über
(denn desselbigen Sabbaths Tag
war sehr groß),
baten sie Pilatum, dass ihre Beine gebrochen
und sie abgenommen würden.
Da kamen die Kriegsknechte
und brachen dem ersten die Beine
und dem andern, der mit ihm gekreuziget war.
Als sie aber zu Jesu kamen,
da sie sahen, dass er schon gestorben war,
brachen sie ihm die Beine nicht;
sondern der Kriegsknechte einer
eröffnete seine Seite mit einem Speer,
und alsobald ging Blut und Wasser heraus.
Und der das gesehen hat, der hat es bezeuget,
und sein Zeugnis ist wahr,
und derselbige weiß,
dass er die Wahrheit saget,
auf dass auch ihr gläubet.
Denn solches ist geschehen,
auf dass die Schrift erfüllet würde:
"Ihr sollet ihm kein Bein zerbrechen."
Und abermal spricht eine andere Schrift:
"Sie werden sehen,
in welchen sie gestochen haben."

さてユダヤ人たちは、
その日が(安息日の)準備の日であったため、
遺体を安息日まで
十字架の上に残しておかないために、
(その安息日は
特に大いなるものであった) ※過越と重なっていたことを指す
ピラトに、彼ら(イエス他2人)の脚を折って
取り降ろすように、と願い出た。
そこで、兵士たちが来て、
イエスと共に十字架につけられた一人目の男の脚を折り、
もう一人の男の脚も折った。
しかし彼らがイエスのところに来て、
彼が既に死んでいることを見ると、
その脚は折らなかつたが、
代わりに、兵士の一人が
槍でイエスの脇腹を切開した。
すると、すぐに血と水とが流れ出た。
それを見た者が、そう証言したのであり、
そして彼の証言は真実である。
そしてその者は知っている、
自分が真実を語っていることを。
それは、あなたがたもまた信じるためである。
なぜなら、これらのことが起こつたのは
書物が果たされるためであったのだ。
すなわち『その骨は一つも砕かれない』と。
また、別の書物はこう言っている。
『彼らを見るだろう、
自分たちが刺し貫いた者を』と。

stochen in ~を突いたもので突く

O hilf, Christe, Gottes Sohn, おお 助けよ キリストよ 神の 子よ	おお、助けてください、キリストよ、神の子よ、
durch dein bitter Leiden, ~によって あなたの 辛い 受難	あなたの辛い受難によって、
dass wir dir stets untertan 【接】 我らが あなたに 不断の ~に臣従した	我らが、常にあなたに従い、
all Untugend meiden, 全ての 悪癖・悪習 避ける	あらゆる悪習を避け、
deinen Tod und sein Ursach あなたの 死 その(死の) 原因・理由	あなたの死とその原因について
fruchtbarlich bedenken, 実のある よく考える	実のある考察ができるよう（助けてください）。
dafür, wiewohl arm und schwach, (前段)の代わりに =obwohl ~ではあるが 貧しい 弱い	その代わりに、(我らは)貧しく弱い者ではありますが
dir Dankopfer schenken! あなたに 感謝の捧げ物 贈る	あなたに感謝の捧げ物を贈ります！

Nr.38 (19:38-42) 第2稿では赤字の歌詞がカットされている。

福音史家 : Darnach bat Pilatum Joseph von Arimathia,
der ein Jünger Jesu war,
(doch heimlich aus Furcht vor den Jüden),
dass er möchte
abnehmen den Leichnam Jesu.
Und Pilatus erlaubete es.
**Derowegen kam er
und nahm den Leichnam Jesu herab.**
Es kam aber auch Nikodemus, der vormals
bei der Nacht zu Jesu kommen war,
und brachte
Myrrhen und Aloen unter einander
bei hundert Pfunden.
Da nahmen sie den Leichnam Jesu
und bunden ihn
in leinen Tücher mit Spezereien,
wie die Jüden pflegen zu begraben.
Es war aber an der Stätte,
da er gekreuziget ward,
ein Garte, und im Garten ein neu Grab,
in welches niemand je geleet war.
Daselbst hin legten sie Jesum,
um des Rüsttags willen der Jüden,
dieweil das Grab nahe war.

その後、アリマテア出身のヨゼフが、ピラトに願い出た。
- この人もイエスの弟子であった
(しかしユダヤ人への恐れからそのことを秘密にしていた) -
彼の請願は、
イエスの遺体を取り外したい、というものであった。
ピラトはそれを許した。
**そのため、ヨゼフは行って
イエスの遺体を取り降ろした。** herab 下へ
そこに、また、ニコデモもやって来た。彼は以前、
ある夜、イエスのもとに来たことがある者だ。
彼は、
没薬とアロエを混ぜた物を untereinander 混ぜた
およそ百ポンド持ってきた。
彼らはイエスの遺体を受け取り、
それを包んだ、
亜麻製の布で、香料とともに、
ユダヤ人が埋葬する際に習慣としているようにである。
さて、そこには、
すなわち、イエスが十字架につけられたその場所には、
園があり、その園には新しい墓があった
かつて誰も葬られたことのない墓である。 je かつて
彼らはその墓にイエスを葬った。 hin legen 横たえる
その日がユダヤ人たちにとって準備の日で（時間が無く）、
またその墓が近かったからである。 um 2格~ willen(~の故に)

※ドイツ語で hundert Pfunden 100 ポンドとあるが、ギリシア語原本では 100 リトラ。リトラは重さの単位としては約 300g、体積としては
4 分の 1 リットルらしい。重さ 30kg の香料はちょっと多いが、25 リットルなら乾燥した植物を大雑把にふわつと詰めればあり得るか？

※ Myrrhe 没薬はギリシア語で smyrna（現トルコのエーゲ海岸の地名スミルナと同綴りだが無関係）。アラビア産の木、およびその樹脂で香料。
Aloe はギリシア語でも aloe。なぜか日本では「沈香（じんこう）」と訳しているが、それはあり得ない。沈香はインド原産の高価な香木で、
日本では平安時代からその名で知られている。沈香を没薬と混ぜたとしても 25 リットルなんて高価すぎて無理。

Nr.39 【合唱】

Ruht wohl, ihr heiligen Gebeine,
憩え 十分に 汝 聖なる 骸骨・骨(複数形で)

die ich nun weiter nicht beweine,
〔関〕 私は 今や なお引き続き 嘆き悲しまない

ruht wohl und bringt auch mich zur Ruh!
憩え 十分に 連れて行く また 私を ～へ 安息

Das Grab, so euch bestimmt ist
この 墓 あなたへ 指定された

und ferner keine Not umschließt,
以後追加で ～ない 苦しみを 包みこむ

macht mir den Himmel auf
私に 天国 開く

und schließt die Hölle zu.
閉ざす 地獄

安らかに憩いたまえ、汝、聖なる骸よ、

私はもはや、あなたについて、嘆き悲しみません。

安らかに憩い、私をもまた安息へと導いて下さい！

この墓は、あなたのために定められ、

今後いかなる苦しみも、包みこむことはありません。

(この墓は)私に天国の扉を開き

auf|machen 開く

地獄への道を閉ざしてくれるのです。

zu|schließen 閉ざす

Nr.40 コラール

第1・4稿&総譜 第3稿ではこの曲はカットされ、第39曲で全曲を終える。

マルティン・シャリング「Herzlich lieb hab ich dich, o Herr」第3節

Ach Herr, lass dein lieb Engelein
ああ 主よ ～に～させる あなたの愛する 天使に

am letzten End die Seele mein
最終の 終末 魂を 私の

in Abrahams Schoß tragen,
アブラハムの 膝元・懐 運ぶ

den Leib in seim Schlafkämmerlein
この(私の) 肉体 彼の 小さな(-lein)寝室

gar sanft ohn einge Qual und Pein
全く 穏やかに ～無しに 若干の 苦痛 痛み

ruhn bis am jüngsten Tage !
憩う まで 最後の審判の日

Alsdenn vom Tod erwecke mich,
その時 から 死 目覚めさせよ 私を

dass meine Augen sehen dich in aller Freud,
(目的) 私の 目が 見る あなたを 全ての 喜び

o Gottes Sohn,
おお 神の 子よ

mein Heiland und Genadenthron !
私の 救い主 恩恵の玉座

Herr Jesu Christ, erhöre mich,
主 イエス・キリスト 聞き入れよ 私を

ich will dich preisen ewiglich !
私は あなたを 讃える 永遠に

ああ 主よ、あなたの愛する天使に命じて

最期の時に私の魂を

アブラハムの膝元へと運ばせてください。

この肉体を彼(アブラハム)の小さな寝室において

全く穏やかに、少しの苦しみも痛みも無く

einge=einige

最後の審判の日まで憩わせてください！

その時には、私を死から目覚めさせてください、

私の目が、全ての喜びの中であなたを見られるように、

おお神の子よ、

私の救い主、恩恵の玉座よ！

主イエス・キリストよ、私(の願い)を聞き入れてください。

私は永遠にあなたを讃えましょう！

1723年1月に行われたトマス・カントルの試験演奏で上演されたとされるカンタータ第23番「汝まことの神にしてダビデの子よ」の終曲で、ルターによるドイツ語訳の「Agnus Dei」である。

Christe, du Lamm Gottes, キリストよ 汝 子羊 神の	キリストよ、汝、神の子羊よ、
der du trägst die Sünd' der Welt, [関] 汝 引き受ける 罪 世界の	汝、世の罪を引き受けて下さる御方よ、
erbarm dich unser ! 憐れんで下さい 我らを	我らを憐れみたまえ！ 以上を2回繰り返し
Christe, du Lamm Gottes, der du trägst die Sünd' der Welt,	キリストよ、汝、神の子羊よ、 汝、世の罪を引き受けて下さる御方よ、
gib uns dein' Frieden ! 与えよ 我らに 汝の 平和を	我らに汝の平安を与えたまえ！
Amen.	アーメン。

<再びの Du sagst's 問題 - 礪山雅「ヨハネ受難曲」(筑摩書房)の記述について>

礪山雅氏は2018年2月に不慮の事故でお亡くなりになった。ヨハネ受難曲の研究論文で博士号を授与される直前のことだった。2年後の2020年1月、遺稿として筑摩書房から「ヨハネ受難曲」が刊行された。

私は、所属する仙台宗教音楽合唱団で2025年にバッハのヨハネ受難曲第2稿を演奏することになったため、この本を入手し、たくさんのごことを学ばせていただいた。

しかしやはり、「ヨハネによる福音書」18:37のルター訳「Du sagst's, ich bin ein König」をめぐる氏の記述には、大いに問題がある。上掲書p.280-281を以下に引用する。

……新共同訳はこの部分を「私が王だとは、あなたが言っていることです」と訳している。ギリシア語を直訳すればたしかにそうなり、近年、この訳を採用する人は多い。

だがルターは、その部分を“Du sagst, dass ich ein König bin”ではなく、“Du sagst's, ich bin ein König”と訳した。つまり「あなたの言うとおりです、私は（一人の）王です」と訳し、イエスの返答をはっきりとした肯定と解釈したのである。“Du sagst's”が「あなたの言う通りだ」という肯定であることは、オレアールウスやカーロフルター派正統派の神学者が揃って明言するところであるから、ここを「あなたの言っていることです」と訳すわけにはいかない。

このルター訳は、間違っているのだろうか。私には、他の多くの箇所でもこの訳が成立するように思えてならない。頻出するこの類のテキストをすべて「あなたが言っていることです」と訳すと、簡単なテキストもつねに煙に巻くような対話になってしまう。単純な肯定と解釈して済むところも、いくつもあのではないだろうか。……

オレアールウスとは Johannes Olearius(1611-84)のことで、「Biblische Erklärung der ganzen heiligen Schrift」という著書がある。カーロフは Abraham Calov(1612-86)のことで、ルター訳聖書に注釈をつけた「カーロフ聖書」はバッハも所持・愛読していたという。

しかし彼らが「Du sagst's」は相手の言葉の肯定の意だ」とわざわざ説いていた、ということは、逆に当時も一般的に、ドイツ語の Du sagst's が肯定の意味には解釈されていなかった何よりの証拠であろう。

礪山氏は上記の文章で、「訳」という言葉を、「ギリシア語聖書の正しい日本語訳」なのか「バッハが受難曲に用いたルター訳ドイツ語聖書の日本語訳」なのか、ハッキリ区別しないで使っている。（それが故意かどうかは不明だが。）

そして最終的には、聖書学の厳格な史料批判を無視して、Du sagst's を肯定と訳したい、という氏個人の願望を書かれているのだ。

最後の「簡単なテキストもつねに煙に巻くような対話になってしまう」という一文では、礪山氏が「イエスのリアルな人間像」を全く理解していないことがわかる。まさにイエスは権力者に対して、そういう「煙に巻く」ような言い方をしていた人なのに。

「Du sagst's 問題」について、私は以前、こちらの文書に詳しく書いてあるので、そちらをご覧ください。

http://classic.music.coocan.jp/pdf/Du_sagst's.pdf

<マタイとヨハネのストーリーの違い>

マルコ・マタイ・ルカの3つの福音書は、共観福音書と呼ばれている。マタイとルカは、マルコの話を中心にしつつも、イエスの発言等を（場合によっては正反対の内容にまで）書き換えたりして別の福音書を作り上げたものである。

ただし、受難物語部分は、マルコ以前に形が定まっていた独立の物語をマルコがほぼそのまま取り入れたもので、マタイ・ルカもそれを受け継いでいる。（もちろん3者それぞれ独自の文にしている所もある。）

これに対して、ヨハネ福音書の著者は、マルコ福音書を知ってはいたが、意識的にそれとは別の独自の物語を書いている。彼はエルサレムの地理や政治体制について、そしてまたイエスの死についても、上3者よりも詳しい情報を持っていたようだ。

ところがヨハネ福音書は、その原著者によって完成された後、教会的ドグマを盛り込みたい編集者グループによって多くの文章が挿入され、矛盾だらけの物語に改竄されてしまった。

ヨハネ福音書では第13章で「晩餐」となるが、そこには有名な聖体拝領の元となる話はない。また後述のように、その晩餐は『過越の食事』ではなく、その前日の『単なる夕食』である。その代わり、そこでイエスが弟子たちの足を洗う話がある（洗足の木曜日）。また、イエスがペテロに対して「鶏が鳴く前に三度私を知らないと言うだろう」と話すのもここである。

その後イエスは第14章から説教を始める。同章の最後で「さあ行こう」と言って晩餐の場から出るのかな、と思ったら、第15章から第17章までまた長い説教が続く。この長大な説教が教会的編集者グループによる挿入文なのである。

これにより晩餐からのストーリーが繋がらなくなってしまい、ヨハネ受難曲は第18章の「逮捕」の場面から作曲することを余儀なくされているのだ。

またヨハネ福音書では、夜中にイエスが捕まってまず連行されるのが、大祭司カイファ邸ではなく、その舅の祭司長ハンナ邸であり、そこでイエスの処分がほぼ決まる。その後連れて行かれるカイファ邸では何の問答も無い。ペテロの否認の2回目・3回目があっただけである。ハンナとカイファの政治的関係（カイファはハンナの傀儡）が分かっていたヨハネ原著者の正確な記事である。ちなみにここで「この年の大祭司」という語句が出てくるが、これは制度に詳しくなかった教会的編集者グループによる書き足しである。大祭司は任期1年ではない。

裁判と十字架刑のスケジュールについて、ヨハネ福音書は、共観福音書と決定的に異なる証言を残している。

ヨハネ福音書ではまず、カイファ邸から総督ピラトのもとへ連行した朝の記述で、ユダヤ人たちがまだ過越の食事を取っていないことがわかる。また第6時（＝正午）にピラトが判決を下す場面では、「この日は過越の準備の日」とハッキリ書いてある。そしてその翌日は「大いなる安息日」、すなわち「大きな祭日である過越祭が重なった安息日」である。

ユダヤの暦では日没で日付が変わり翌日となる。イエスとその両脇の2人は「過越の準備の日」の午後には十字架につけられたのだが、日没で「過越祭かつ安息日」になる前に死んでもらうため、両脇の2人は脚を折られる。しかしイエスは既に死んでいたため折られずに済んだ。（脇腹を槍で刺された話は編集者グループの付加。）

これに対し共観福音書では、イエスは過越の食事の後、その晩のうちに逮捕され、大祭司カイファ邸で裁判。早朝に総督ピラト邸に連行されて即刻裁判。イエスは十字架をかついでゴルゴタまで歩いているはずなのに、午前9時（マルコに「第3時」と記載されている）には十字架に架けられている。これはいくらなんでも時間的に無理がありすぎる。その後、第6時（正午）にあたりが暗くなり、第9時（午後3時）にイエスは死ぬ。遺体は折られたり刺されたりはしていない。その後すぐに埋葬となる。

実は、マタイ・マルコを受難物語冒頭部分でも、イエスを殺そうと計っている祭司長たちが「祭りの間はいけない。民衆が騒ぐかもしれないから」と言い合っているのである。にもかかわらずその後、イエスが過越の食事をし、その晩の逮捕となるのは、どう考えてもおかしい。

こうしてみると、受難物語については、ヨハネ原著者の記述のほうが共観福音書よりも、全般的な内容に矛盾が無さそうだ。

しかし、イエスの十字架上の最後の言葉は、マタイ・マルコの「わが神よ、どうして私をお見捨てになったのですか」が“歴史的事実”である。

教会にとって都合が悪いこと（神の子イエスが神にクレームをつけた！）を、教会関係者が作り話するはずがないからである。ルカの「神よ、私の命をあなたに委ねます」は明らかに作られた優等生発言だし、ヨハネの「成し遂げられた」に至っては神がかりすぎている。

ここでヨハネのみに書かれている、「十字架上のイエスが、母を気遣って後見人を定めた」という話についてもコメントしておく。

まず、マルコ・マタイでは十字架の場面にいたイエスの母を「ヤコブとヨセフの母マリア」というような書き方をしている。ヤコブとヨセフは、マルコ 6:3 でイエスの兄弟であると書かれている。そしてマルコ 3:31-34（及びマタイ 12:46-49）では、イエスは母マリアのことを否定し「私の母・兄弟とは誰か。それはここに共にいる方々だ」と言っている。これは律法に逆らった行動をしているイエスのことを「母や兄弟たちが捕まえに来た」場面である。

しかし、のちにイエスの弟ヤコブは使徒行伝第15章に見られるように、ペテロとともにエルサレム教会の指導的人物に成り上がっていた。そのことに対してマルコ福音書著者は、「母マリアも弟ヤコブもイエスのことを理解しなかったくせに」と不愉快に感じていた。だから「イエスの母」と書かずに「ヤコブとヨセフの母」と書いたのである。これに対して、ヨハネ福音書の著者も、初期エルサレム教会のペテロ・ヤコブらに批判的な立場であったが、それとは別に、事実として十字架刑場に「イエスの母マリア」がいたと書き、さらに「愛する弟子」に母を託した話を書いた。

イエスの死後、他人が母マリアの面倒を見たという可能性はもちろんあろう。しかし実際問題として、とりあえず弟たちがいたのだから、アカの他人に母を託する必要は全く無かったはずなのである。おそらくこれは、「愛する弟子」というキャラクターに、一つ役割を与えるための創作話であろう。